

# 関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンと

## その教え子―曾根保と由木康

池田 裕子

### I はじめに

ペーテリス・ヴァイヴァルス (Pēteris Vaivars) 駐日ラトヴィア共和国初代特命全権大使が二〇〇八年一月一〇日にお持ちくださったラトヴィア語論文「JĀNIS OZOLIŅŠ — LATVIJAS DIPLOMĀTISKĀIS UN KONSULĀRAIS AGENTS KOBĒ, JAPĀNĀ (1920-1921)」の日本語訳が本号に掲載されるこの機会に、当論文入手のきっかけとなった小文「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンをめぐる<sup>(1)</sup>」(『学院史編纂室便り』第二十六号、二〇〇七年一月一四日)を併せて掲載することになった。転載に当たり、手を加えた箇所とその意図を説明しておきたい。

イアン・オゾリン (Ian Ozolin, 1894-1959)<sup>(2)</sup> とは、一九一八(大正七)年九月から二一(大正一〇)年七月にかけて、関西学院高等学部(文科・商科)で教鞭を執っていたラトヴィア人であ

る。アメリカとカナダのメソヂスト教会が経営する関西学院で、英語を母語としないラトヴィア人が英文学を教えていたというのは、一体どういう事情によるのだろうか。そして、彼は教え子にどのような感化を与え、関西学院に何を残したのか。限られた資料ではあったが、『学院史編纂室便り』において、これらの疑問に対する答えを模索した。本稿では、オゾリンの在職期間を資料に基づき再検討した上で、教え子として由木康（ゆきこう）（一八九六―一九八五）の他に著書『琥珀の國』<sup>③</sup>を翻訳した曾根保（一八九六―一九七六）を新たに取り上げる。教え子の目を通して教師オゾリンの姿をより鮮明に浮かび上がらせるためである。ただし、オゾリンの祖国ラトヴィア側に残る資料を用いていない点は前稿と同様である。本稿は、日本（主として関西学院）に残る資料から何が言えるかという立場からの考察である。一方、翻訳が完成したラトヴィア語論文はラトヴィア側の資料をもとに書かれているので、双方に目を通すことにより、オゾリンとその祖国に対する理解が一層深まるものと期待される。

## Ⅱ ラトヴィアとラトヴィア人―オゾリンの著書『琥珀の國』より―<sup>④</sup>

ラトヴィアという国は日本ではあまり知られていない。それは、オゾリンがいた九〇年前も今も変わらないようだ。二〇〇七年春、天皇・皇后両陛下のバルト三国訪問が大きく報じられたことにより、初めてこの国を意識した人も多いだろう。カメラ好きであれば、一九三七年に発売されたラトヴィア製の超小型カメラ・ミノックスを思い起こすかも知れない。あるいは、ソ連支配下にあった一九八九年八月二三日、バルト三国（北からエストニア、ラトヴィア、リトアニア）

平和會議の定めたる  
欧州に於ける新國境



此地圖に據れば如何に歐洲民族に従つて新しく區分されてなるかが明かである。即ち古の境界内に昔のまゝの國民があまり過去の不當なる境界が修正されてなる。  
此地圖は亞米利加委員會公報の爲に亞米利加地理協會の作製したものである。

の二百万人が手を繋ぎ、六五〇キロにわたって人間の鎖を形成した「バルトの道」抗議行動を記憶する人もいるだろう。いずれにしても、日常的に意識することの少ない国のひとつである。そこで、ラトヴィアとラトヴィア人を理解するに当たり、オズリンの著書『琥珀の國』を取り上げたい（地図も同書より）。オズリンによれば、「ラトヴィアはバルト海の南沿岸にある北欧国の一つで、面積は白耳義の二倍以上<sup>ベルギー</sup>。人口は諸威或は丁抹と略同等<sup>デンマーク</sup>で」、そこには「欧州最古の国民たるレット人（或はラトヴィヤ人）」が住んでいる。オズリンがラトヴィア人を「欧州最古の国民」と主張する根拠はその言語にある。ラトヴィア語は、リトアニア語、古代プロシア語と共に、インド・ヨーロッパ語族の中で古い特徴を最もよく残すと言われるバルト語派に属している。オズリンは具体例を挙げ、こう述べている。「レット語と比較出来る言語は古代印度のサンスクリットばかりである。併し此の国語も既に死語となつてしまつたので欧州以外にもレット語より古いアーリア語系の国語は無いのである」。

オズリンによれば、日本人がラトヴィアを知らないのは「露西亜人の手に依て世界地図の表

面から取り消されてゐた」からで、ラトヴィアは「公然と露西亞の『波蘭（バルト）領』として記載されてきたのである。それで筆でなり口でなりで『ラトヴィヤ』といふ字を用ゐる様な事があればそれこそ政治上の罪人だといって迫害を受けたものである」。ラトヴィアを支配下に置いたのはロシアだけではない。それ以前にも、ドイツ、ポーランド、スウェーデンの支配を受けてきた。

ラトヴィアの独立宣言は一九一八年であるが、そのきっかけをオゾリンは日露戦争に求めた。「ロシアの『双鷲』<sup>(6)</sup>の暗い翼の陰に苦んでゐる一小国が日本の為に最後の勝利を明暮祈つたといふ事は日本人の恐らく気の付かなかつたところであらう。其の戦役当時著者はまだ学生であつたがラトヴィヤ国中に言ひ知れぬ光明を漲らした旅順陥落の飛報を手にしたかの夕をよく記憶してゐる。あの喜ぶべき夕を記憶してゐる。此の夕の歓喜は実に日本人以上のものであつたと言ひ得られる」。旅順陥落は一九〇五年一月二日のことであつた。さらに、日本海海戦で日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を破つたことにより、日本の勝利は決定的になつた。バルチック艦隊はラトヴィアの軍港リエパーヤから出発してゐた。<sup>(7)</sup>

その後「ラトヴィヤ国は全露に蔓延したかの革命の渦中に投じた」。しかし、この革命も独立をもたらすには至らなかつた。なぜなら「露西亞の専制政治は日本に破られた為に打撃を受けたが、レット人の予想通りに其場で倒れはしなかつたからである」。

ラトヴィア独立のためには、さらに第一次世界大戦を経る必要があつた。「一千九百十七年の露国の第二革命があつた後レット人の世論は復、ラトヴィヤ国の独立を高唱し、一千九百十八年一月レット人はロシアの議會に於て其の意見を公表した。ラトヴィヤ国の独立を樹立する為に国



会といふ名目の会が組織せられ、一千九百十八年十一月十八日にリガに於てラトヴィヤ国の独立自由国たることを宣言し事実上連合強国（日本を含む）及び其他の諸国に依て承認されたのである。それから再びソ連に併合される一九四〇年までの間、ラトヴィアは独立国として存在した。オズリンの関西学院在職は、独立直前から直後の時期に当たる。「日本帝国政府がラトヴィヤ共和国の事実上の独立を真先に承認し又最後の法律上の承認をも久しからずして与へられたる其の公正なる立場を感謝せざるを得ない」とオズリンは書いている。<sup>(8)</sup>バルト三国で日本が公使館を置いたのはラトヴィアの首都リーガだけであつた。<sup>(9)</sup>

### Ⅲ 関西学院高等学部教師としてのオズリン

#### 1 オズリンの赴任

大正期の関西学院は原田の森（現・神戸市灘区）にあつた。一八八九（明治二二）年にアメリカの南メソヂスト監督教会が創立した当初、神学部と普通学部で始まつた関西学院の経営にカナダのメソヂスト教会が加つたのは一九一〇（明治四三）年のことであつた。その二年後に開設された四年制の高等学部（文科・商科）でオズリンは英語を教えたのである。学校の規模としては、七〇名の教職員の下、一、二七五名の学生・生徒（中学部七八〇名、神学部五四名、高等学部四四一名）が学んでいた。<sup>(10)</sup>

高等学部がどのような陣容で何を教えていたかを知るには『要覧』が役に立つ。オズリンの名は次の『要覧』の「職員教授及講師」欄に登場する。<sup>(11)</sup>



・『私立関西学院高等学部（文科・商科）要覧』

一九二〇（大正 九）年 二月版

講師 英語 ヤン オゾリン

一九二〇（大正 九）年 二月版

講師 英語 ヤン オゾリン

・『関西学院高等商業学部要覧』

一九二二（大正二〇）年 五月版

講師 英語 ヤン オゾリン

また、『卒業アルバム』の中にもオゾリンを見出すことができる。オゾリンの写真と名前が残るアルバムは次の三冊である。

・『高等学部商科第四回卒業アルバム』（一九一九年）

オゾリンの個人写真と教員室（右から四人目がオゾリンだと思われる）の写真が掲載されている。巻末の「恩師芳名録」にオゾリンの名は見当たらない。

・『高等学部商科第五回卒業アルバム』（一九二〇年）

写真の掲載はないが、巻末の「恩師芳名録」講師の二番目に「ヤン、エイ、オゾリン <sup>(イ・イ)</sup> Yan. A. Ozorin」の名がある。<sup>(12)</sup>

・『高等学部商科第七回卒業アルバム』（一九二二年）

写真はないが、「教授短評」欄に次の紹介文が掲載されている。

J. A. Ozolin ラトヴィア共和国人、外国人だが非常に正確な英語を話しそれでアメリカには

二年ほどしか滞在せられなかったそうである。精力主義を奉ずる人で寒中水泳も時々舞子の浜でしられたことがある。

さらに、オゾリンが関西学院に來た時のことを書き残した文科の学生（中村清）がいる。<sup>(13)</sup>「私が一年であった時の夏休みのこと、畑先生が一人の露西亞人<sup>（ラトヴィア人）</sup>を伴って寮へ來られた。そして休暇中或寮生の室を借りて滞在することゝなった。一露西亞人と云ふのは後に文科で英文学の講義をせられたオゾリン氏であった。私がオゾリン氏を知ったのは即ちこの時である。在寮中は朝晩 Y・M・C・A にて英語と露語の会話を教へてゐた。非常に精力家で勉強家であった。毎夜 Y・M・C・A から帰つて來ると一時二時、時には三時頃までも勉強してゐた。これには居残りの寮生達は驚いてゐた。氏は未だ日本に來てから日が浅いので日本語を知らなかった。寮生達はつとめて近代的（？）な言葉（日本語）を教へたから堪らない。氏は教つた言葉を直ちに男女の区別なしに使用して話しかけた。それで幾度も滑稽が演ぜられた。斯くして休暇中残留の寮生達は氏を中心にして面白い日を送ることが出来た」。

この記述から、オゾリンを連れて來たのは畑歛三であることがわかる。<sup>(14)</sup>それは「ラトヴィアの貧しい家に生まれ大根を嚙りつゝ、国境を越えてドイツに入り、ラトヴィアのリガ大学卒業後アメリカにわたつて、こゝで畑教授と相知り学院へ來れることになった」という記述とも一致する。<sup>(15)</sup>関

西学院普通学部出身の畑は、早稲田大学文学部専門部卒業後、東京の麻布中学校教師を務めていたが、一九一二年一二月に渡米、アラメダとオークランドの日本人学校で教えながら、カリフォルニア大学のポープ教授 (A. J. Pope) の下で美学とギリシャ哲学を学んだ。一九一七年、母校に戻り、高等学部教師として主に英作文を担当した。<sup>(16)</sup> アメリカでオズリンと知り合った経緯については明らかにされていない。

ここで気になるのは、オズリンがロシア人と記されていることである。独立前のこととは言え、当人はラトヴィア人と書いて欲しかったであろう。なぜなら、オズリンはラトヴィア人とロシア人の違いについて力説しているからである。<sup>(17)</sup> 「ラトヴィヤ民にはスラブ人と共通な所は全然ない」といふ事を記憶せねばならぬ。ロシア人は高加索系<sup>コーカサス</sup>の人種で、レット人、英国人、独逸人、仏蘭西人及び其の他欧州の多くの国民と同じく白哲人種<sup>はくせき</sup>であるといふ事を除いては其の間には何の關係もない。レット人と露西亞人とを混同するのは露西亞人と英国人を混同し、日本人とフィリピン人とを混同するのと同じ誤謬である」。

以上の資料により、オズリンの赴任時期をある程度推測することはできるが、特定するには『理事會記録』を遡る必要がある。同記録にオズリンの雇用承認の記述が登場するのは一九一八年春である。休暇中のカナダ・メソヂスト教会宣教師ウッズウォース (H. F. Woodsworth) の代わりの英語教師として、九月から月給百円でロシア人バプテスト、オズリン氏を雇用するとの記録がある。<sup>(18)</sup> 引き続き六月五日の常務委員会で、高等学部で英文学を教えるため、九月から学年末(三月)まで月給百円でオズリンを雇用するとアームストロング (R. C. Armstrong) 高等学部長が説明し、承認された。この時の院長は、アメリカ人宣教師ニュートン (J. C. C. Newton) である

が、休暇帰国中であつた。<sup>(19)</sup>なお、『理事会記録』でロシア人とされているのは、オゾリンには気の毒だが、ラトヴィア独立前の公式記録としては致し方ない面もあるう。

## 2 オゾリンの辞職と離日

では、オゾリンの辞職はいつであろうか。その時期を調べて心打たれるのは、オゾリンを惜しむ声の大きさである。それは、短い在職期間にもかかわらず、その貢献の大きさを偲ばせるものである。

一九二一年六月二〇日の常務委員会は、辞職するオゾリンに謝礼百円を贈ることを決した。さらに、ウッズウォース文学部長とベーツ (C. J. Bates) 院長より、オゾリンに対する感謝決議が提案され、承認された。この他の資料からも感謝の言葉を拾い出すことができる。

・ 最近の欧州大戦乱を母に持てる新興国ラトヴィアの領事オゾリン君が高商部の講師として数年間学生に与へられたる紳士的感化と学術上の知識とは多大の感謝に値するものなるに、此回の辞任本国リガ市への帰郷は深く惜みて氏を送ると共に新建国の為に斯新人の安健と努力を祈る (『関西学院学報』第一号、一九二一年七月二五日)。

・ オゾリン氏 リトニア<sup>(リトニア)</sup>の人で英文学に造詣深い同氏は過去一年間文科教授として熱心教鞭を執られ英文学と云ふ物が始めて解りかけたと文科生を感嘆せしめた同氏は任期盡きて学生の留任懇願も功を奏せず満州へ向け出発された (『関西学院同窓会報』第二号、一九一九年八月一〇日)。

後者が伝えるオゾリンの満州への出発は興味深い事実を示唆している。先の『常務委員会記録』により最終的な辞職が一九二一年七月であることは明らかなので、一八年九月から一年間勤務した後、いったん関西学院を離れたことを意味するからである。しかし、「一九一九―二〇年予算書」にはオゾリンの名と給与額が計上されていることから、関西学院としては雇用を継続するつもりであつたことがうかがえる。<sup>(20)</sup>

前者にラトヴィア領事とあるが、これは「関西学院大学の前身で英語と英文学を教えていた」と同時に、「神戸で新生国家ラトヴィアの領事代理の仕事をもしていた」という志摩園子の調査とも一致する。<sup>(21)</sup> オゾリンは「日本の政治、経済事情をラトヴィア外務省宛に送付しているだけでなく、両国間の貿易についても推進しようとしてい」たらしい。さらには、「ウラジオストツクにある臨時政府の極東・シベリア代表部のマズポリス (Jānis Mazpulis) とも連絡を取り合い、ラトヴィアあるいは、シベリアまたは中国からのラトヴィア人の特別使節の可能性を一九二〇年には尋ねている」。「当時、極東には、およそ五〇万人のラトヴィア人の避難民や植民者がいた」のである。『村上博輔日記』によれば、オゾリンが神戸港を出発したのは一九一九年七月七日である。<sup>(22)</sup> それから関西学院に再雇用されるまでの間、満州、あるいはシベリアで、祖国のため何らかの活動に従事していたと思われる。志摩は、来日前アメリカで「ラトヴィアについての広報的な活動」をオゾリンが行っていたと指摘している。独立を達成するには「事実上の国家承認」を取り付ける必要があつた。第一次世界大戦終結前から、のちに初代外相となつたメイローヴィツ (Z. A. Meierovics) を中心にラトヴィア人は外交活動に力を入れていた。来日前のオゾリンの活動もその一端を担うものであつたと推測される。来日後、オゾリンは関西学院教師として学

生に慕われながら、その活動をさらに展開させていったのではないだろうか。その意味からも、オゾリンの来日理由、関西学院教師となった経緯について明らかにする必要がある。関西学院の対応がオゾリンに好意的であったことを考え併せると、アメリカとカナダのメソヂスト教会がラトヴィアの独立運動にどう関わったかという点も興味深いところである。

オゾリンの再雇用は、一九一九年秋の理事会で、デイヴィス (W. A. Davis) の代わりの臨時教師としてニュートン院長から説明され、承認された。引き続き十二月一九日の常務委員会で、南メソヂスト監督教会宣教部を代表してニュートン院長が、デイヴィスの代わりの宣教師スタッフとして、一九二〇年一月一日から春学期の終わりまでオゾリンを雇用する許可を求め、承認された。デイヴィスはいったん復帰したものの、同年一月、離日した。オゾリン雇用の案件は、ウツズウォース高等学部長(代理)により一九二〇年八月三日の理事会の議題に再び挙げられたのち、同月二八日の常務委員会で審議された。その結果、八月一日から一年間、週一八時間、月給三百円でオゾリンを高等学部講師として雇用する許可がウツズウォースに与えられた。<sup>(23)</sup>

オゾリンの赴任と辞職に関するこれらの資料を踏まえると、その在職期間、あるいは関西学院に関わった期間として次のように言えるだろう。まず、『理事会・常務委員会記録』の議決により確認できる正規の雇用期間として一九一八年九月から一九一九年三月まで、および一九二〇年一月から一九二一年七月まで。これに、臨時教師としての雇用期間一九一九年秋から一九二〇年二月までをプラスする。さらに、同記録に添付された「一九一九―二〇年予算書」と『関西学院同窓会報』の記述、および次項「3 オゾリンの授業等」で紹介するタイプ原稿後者から推定される一九一九年四月から七月までを加える。すなわち、一九一八年九月から一九二一年七月まで(ただし、一九一九

年七月上旬にいったん辞職し、秋に臨時教師として再雇用されるまで離日していた」と見なすが現時点では妥当であろう。<sup>(24)</sup>

### 3 オゾリンの授業等

オゾリンの学生との関わりについては「IV 教師オゾリンと学生の関係」で取りあげるが、その前に、学生たちに強烈な印象を与えた学校での様子を『文学部回顧』（一九三一年）から紹介しておきたい。同書は、関西学院に残る年史の中で、オゾリンの存在を生き生きと現在に伝えるほぼ唯一のもので、前述の『卒業アルバム』と同一の個人写真も掲載されている。

・「眉は連なり、丈低く、色は白かったがとにかく一見甚だ感じが悪く、言葉がドイツなまりの英語と来てるからこいつア困りもの。が性質は至って無邪気、いつもムキになって学生と喧嘩し、そうかと思ふと一緒に肉もつ、かうといふ。昼食はいつも学生食堂で学生と一緒に並んで味噌汁や漬物をも食べ、カレーライスにさては玉子丼といふ工合、日本箸もうまく扱い、冬でも海へ入られたといふから余程の変り者たるを失はない。（葉氏談）街に出るとよく学生に奢って下すつて、劇、詩の方面に関して学生の眼を開いてくだすつた人。語学大会もオゾリン講師によつて劇らしくなつたといふ事である。今ラトビアの文部大臣をやつてゐられるといふから大したものだ。（一九二二年七月職を辞す）（畑氏、村上氏談）」（オゾリン氏の事どもその他」<sup>(25)</sup>、二五頁）。

・（前略）現在文科の四年ではラトビアの青年文学者オゾリン氏が“Problem of Change in





Poetry”や『詩の原理』等を講じ：」(二二頁)。<sup>(26)</sup>  
 ・「オゾリン教授は学生の関心の的で、大いに学生を沸かせた。実に博学で、輝かしい知性の持ち主であつたが、一風変わった性分だった。私たち(教師間)の個人的関係は大変良好だったが、学生との間には数々の困難が生じた。…オゾリン教授はラトヴィアで出世し、有力者の地位にあると伝えられている」(H. F. Woodsworth, “The Reclection of Our Literary College,” p. 283)。

最初の引用文に登場する語学大会は、当時の英語会(現在のESSの前身)の最大年中行事であつた。一九一五(大正四)年に第一回大会が神戸YMCAで開催され、空前の大盛況だったと伝えられている。<sup>(27)</sup>一九一七(大正六)年一月に行われた第二回大会では、カナダ人宣教師ウヅウォース夫妻とアメリカ人宣教師マシユース(W. R. Mathews)の指導により、シェイクスピア劇が披露された。<sup>(28)</sup>同年一月一七日に神戸YMCAで開催された〔第三回〕大会に関しては、招待状とプログラムが残されている。同プログラムによると、商科、文科、神学部順に三本の英語劇が上演されている。<sup>(29)</sup>また、授業で学んだシェイクスピアの『リア王』が演じられたこともあつた。<sup>(30)</sup>オゾリンが監督を務めたのは、一九一九(大正八)年二月に開催され

た第五回大会である。<sup>(31)</sup>その時の様子を教え子の曾根はこう述べている。<sup>(32)</sup>「関西学院ではこの大学にもあるように、一年に一度は英語劇が催された。オズリン作の『銀三十』という題でユダがキリストをローマ兵に売る場面だが、英語がよく、参加学生の熱心さもあって好評を博した。」「銀三十」とは、『新約聖書』のマタイ伝を題材にしたものであろうが、聖書に馴染みのない人間でも太宰治の短編小説『駆込み訴え』なら脳裏に浮かぶだろう。太宰はイエス・キリストの弟子イスカリオテのユダの心を独特の語り口で描いた。オズリンの「銀三十」上演は『駆込み訴え』発表の二一年前である。太宰と同じテーマでオズリンは一体何を表現したのか。残念ながら、脚本は見付かっていないが、その時の舞台を撮影したと思われる写真（前頁）がある。<sup>(33)</sup>なお、オズリンが関西学院で担当した授業については、次の資料（タイプ原稿）が残されている。<sup>(34)</sup>「その英文学史は哲学や人生観を織りまぜた独特なものであった」と教え子が伝える内容を具体的に知る手がかりになると思われるが、その検討は今後の課題である。

・ *Twelve Lectures on the Meaning and Value of Life: Literary Expressions of the Ethical Problems of Epicureanism, Stoicism, Mysticism, and Activism, or Ideal-ism.*

Ian A. Ozolin, Kwansei Gakuin College, Kobe, 1919, 80p.

・ *An Introduction to English Poetry: A Syllabus of Talks on the Elements of English Poetry Delivered at the Kwansei Gakuin College During the Spring Term of 1919.*

Ian A. Ozolin, Kobe, 1919, 32p.

オゾリンは、著書以外にも多くの本を関西学院に残した。現在、大学図書館の原簿台帳から確認できるだけでも九一冊ある。<sup>(35)</sup>その中には、自らの日本語学習用あるいは日本訪問に備えて入手したと思われるものや、貼付されている「関西学院図書館図書貸出日表」から学生に利用された様子がうかがえるものもある。<sup>(36)</sup>これらの蔵書の分析からも、オゾリンの一面を明らかにすることができるであろう。

#### IV 教師オゾリンと学生の関係

学生は教師から様々な影響を受ける。しかし、その感化を教え子の人生や作品から読みとり、具体的に指摘することはさわめて困難である。関西学院の学生は、祖国独立に熱い思いを抱くオゾリンからいかなる影響を受け、何を学んだのだろうか。「劇、詩の方面に関して学生の眼を開いてくださった人。語学大会もオゾリン講師によって劇らしくなった」と評されていることは既に紹介した。ここでは、オゾリンの教え子として高等学部文科(英文学科)卒業生曾根保(一九一九年入学、二三年卒業)と由木康(一九一六年入学、二〇年卒業)の二名を取りあげ、その影響を探ってみたい。のちにブラウニング研究の第一人者となった曾根は、『琥珀の國』翻訳者としてオゾリンの最も近くにいた学生と思われる。また、パスカル研究家、讃美歌作家として名をなした由木は、忘れられない教師として、畑歆三、河上丈太郎と共にオゾリンの名を挙げている。

## 1 曾根保の場合

曾根保は一八九六（明治二九）年七月二二日生まれであるから、師弟関係と言っても、一八九四年生まれのオズリンとは二歳しか違わない。兵役経験後の入学であったため、入学時の年齢は二二歳になっていた。

曾根に関しては次の二種類の自伝がある。この中からオズリンにつながる記述を抜き出し、その影響を考えてみよう。

・曾根保（口述）『ある英語教師の記録』、一九八二年。長男翼により、没後六年して出版された。  
・向山義彦<sup>むこやま</sup>「ブラウニング研究者 曾根保の自伝」、梅光女学院大学『英米文学研究』三四号、一九九八年、二二五―二四三頁。ブラウニング研究を始めた動機等に関する向山からの照会に対し、曾根が一九七三年に返送した「ブラウニングと私」が、向山により発表された。

曾根は、入学時に入った第二啓明寮で学院生活の四分の三を過ごした。<sup>(39)</sup>残り<sup>(40)</sup>は、オズリンに誘われ、舞子で共に暮らしている。この同居が『琥珀の國』翻訳のためだとすれば、それは確かに好都合であったろう。曾根がオズリンから翻訳料を受け取ったかどうかは定かでないが、<sup>(41)</sup>「舞子駅から西灘駅までの定期乗車券を買ってもらったばかりでなく、行き届いた御世話で通学が出来た。汽車の中は四、五十分で乗客もすくなかったから、ロシア語を教えてあげようと言われたが、私は大学へ行けば第二外国語として独仏語をとるのが普通だから、独語を教えて貰うことを頼んだ」と書いている。<sup>(42)</sup>曾根の表現を借りれば、オズリンは「十六ヶ国語の言葉が話せるという語学の天才だった」。<sup>(43)</sup>

舞子暮らしを曾根は満喫した。「舞子公園の家は目の下に松原を見下ろし、明石海峡を越えて淡路島の灯台を眺め、景色としては須磨や明石とは比べ物にならぬ程美しいので独り部屋に座っていても、空行く雲、青い海を頻繁に行き交う外国汽船、裏山の鳥の声、目が覚めてから日暮れまで詩情を誘うものばかりだった。夜は、下の東海道線の列車の音がたまに聞こえるぐらいだから、ブラウニングの詩を読んだり、近所に住む神戸女学院の女の子と仲良しになったり、青春が一杯と言うのはこんな事だったろうと思う」<sup>(44)</sup>。

オゾリンの近くにいた曾根は、恩師が故郷ラトビアを出発してから関西学院出身の畑歎三と出会ったことも書き残している。「オゾリン教授はラトビアのリガ出身だが、赤色ロシアを嫌ってアメリカに渡り、東部から西部へバイオリンを抱えて流しなどし、汽車のただ乗りの常習犯ともなつて南カリフォルニアに辿り着き、南加大学<sup>(ママ)</sup>の美術科<sup>(ママ)</sup>に入学し、卒業と同時に関学に來られた」<sup>(45)</sup>。

「語学の天才」の教えが功を奏したのか、曾根は在学中首席で通した。級長を務めていたため、体操教師の命を受け、同級生の出席をとることもあった。<sup>(46)</sup> 学籍簿を見ると、二年時の成績が記入されていない。代わりに備考欄にこう記されている。「第二年ハ入宮ノ事情ノタメ成規ノ成績ヲ有セザルモ平素ノ学力ト操行性格ヲ認メテ教授会ノ決議ヲ以テ進級セシメタリ」。

曾根自身による次の述懐も、曾根の優秀さ、オゾリンとの関係の深さを示すものである。「オゾリン先生は四年のクラスでブラウニングを教えておられたが、特に許しを得て、三年生であったが、その組に出席させてもらった。同級生の目には、不愉快なこととしてうつったかもしれない」<sup>(47)</sup>。その授業のことを「オゾリン教授のブラウニングの詩の講義も当時の私の心にびつたり合

致するように面白かった」と語っている。<sup>(48)</sup>

こうして見てくると、曾根が翻訳を任された第一の理由は、その抜群の英語力を買われてのことであつたに違いない。しかし、オズリンと親しくなった要因としては、曾根の軍隊経験を考慮に入れる必要があると思われる。曾根は、関西学院高等学部卒業後、東京帝国大学文学部に進学し、そこで、英国の詩人ブランデン (Edmund Blunden, 1896-1974) と出会い、親しい交わりを得た。<sup>(49)</sup> ブランデンに可愛がられた理由として、曾根は自身の軍隊経験を挙げている。第一次世界大戦でヨーロッパ大陸に出征したブランデンは、軍隊生活を経験していない学生を別の目で見ていたかも知れないと考えたのだ。「ブランデン先生は私が軍隊生活をしたというだけで望ましい学生であるといわれた」。<sup>(50)</sup> 同じことがオズリンとの関係においても言えるのではないだろうか。曾根は帝国陸軍騎兵隊少尉である。日露戦争で世界最強と言われたロシアの騎兵隊を秋山好古少将率いる日本の騎兵部隊が撃退したことは、旅順陥落の報に狂喜したオズリンの耳にも当然届いていたはずだ。<sup>(51)</sup> 曾根とブランデンとの美しい友情の影には、関西学院時代に築いたオズリンとの友情とも言える師弟関係が見え隠れする。恩師から同居の誘いを受け、翻訳を任されるほどの信頼を得たことは、その後の曾根の人間関係構築に深く作用したと考えられる。

一九三〇(昭和五)年に大英博物館東洋部長ロレンス・ビニヨン (Laurence Binyon, 1869-1943) が日本の美術視察のため来日した時、二ヶ月にわたって通訳として同行したのも、アメリカ時代にオズリンが学んだと曾根が記述する分野との共通点を感じられ、興味深い。オズリンのアメリカでの大学生活に関する調査を進めた上で、この点をもう一度考えてみたいと思う。最後に、オズリンから受けた影響を曾根自身がどう自覚していたかであるが、それはやはり生

涯の研究テーマであろう。関西学院卒業後進学した東京帝国大学で、市河三喜、斉藤勇両教授の指導の下「英国哲学的詩人ロバート・ブラウニングの研究」に従事し、一九三二（昭和七）年には訳書『Robert Browning — 彼の生涯と作品』で第一回岡倉賞を受賞した<sup>(32)</sup>。曽根は関西学院入学以前からブラウニングの名を知っていたが、関心を持つきっかけとなったのは、関西学院の新入生歓迎会で池田多助教授が和訳の「天使と少年」を披露したことであった。その詩に魅せられた曽根は、早速池田を訪ねたのである。その後、ウッズウォースやオゾリンの授業でブラウニングについて学び、さらに関心を深めた。関西学院高等学部に提出した卒業論文のタイトルは「ロバート・ブラウニングの恋愛詩研究」<sup>(33)</sup>であった。

## 2 由木康の場合

曽根より三学年上の由木康は、一八九六（明治二九）年四月一六日の生まれである。曽根と同じ年の生まれなので、オゾリンより二歳年少なのも同じである。由木に関しては、次の自伝的随筆があり、「20 三人の良き師に恵まれる」の中でオゾリンに触れている。

・由木康『出会いから出会いへ―ある牧師の自画像』教文館、一九七六年。『キリスト新聞』の「立琴」欄に一九七四年から翌年にかけて連載された読み切り短文のコラムをまとめたもの。

由木によれば、オゾリンの授業は凄まじかったようだ。「年齢からいえば学生より少し上くらの青年であり、私たちには英詩や英文学史の講義をしてくれた。非常に熱情的な男で、わずか

数名の少クラスで、あたかも大演説をするかのように、こぶしをふりあげ、足をふみならし、口角泡を飛ばして論ずるさまは、全くすごいほどであった。この人の感化で私はブラウニングに興味をもつようになり、この詩人の全集（ケンブリッジ版）を相当の高価で手に入れただけでなく、卒業論文もブラウニングの人生観を取り上げるに至ったほどである。オズリンは関学の近くに下宿していたので、時々、銭湯で一緒になり、文字どおり真つ裸でつきあうこともできた。しかし、彼はまもなく風のように日本を去り、ヨーロッパに帰ってしまった」。<sup>(55)</sup>

前項で曾根の成績が優秀であったことを紹介したので、由木も首席で卒業していることをその名譽のため記しておきたい。一年時の夏休みに父親を亡くし、退学するつもりだったが、ベーツ高等学部長の計らいで授業料免除のまま学業を続け、卒業した。<sup>(56)</sup> その由木が作詞・翻訳した讚美歌は生涯で六百を越える。<sup>(57)</sup> 中でもとりわけ有名なのは讚美歌一〇九番「きよしこの夜」の訳詞である。関西学院のためには、校歌「緑濃き甲山」<sup>かふと</sup>を作詞している。第二校歌とも呼ばれるこの歌は、創立五〇周年を記念して一九三九年に作られた。「今や公然と歌えなくなった『Old Kwansei』空の翼」の代わりに、公然と歌える新校歌の制定を切望する声が全学院からわき起こ<sup>(58)</sup>り、同窓の由木と山田耕笹に作詞作曲が依頼されたと伝えられている。

「緑濃き甲山」を聞いて驚かされるのは、その美しく穏やかなメロディである。時局を考えてという事情とは裏腹の、讚美歌のようなこのメロディはどう受け止めればいいのか戸惑うほどである。山田の前作「空の翼」が応援歌風であるのとは対照的に、「緑濃き甲山」は「ナポリ民謡を思わせる美しいメロディー」と評される。<sup>(59)</sup> また、『空の翼』での『Mastery for Service』や『輝く自由』などに代わって『樹々、白亜、光』や『信、知識、力』などが物静かにつづられ<sup>(60)</sup>てい



る。<sup>(60)</sup>。それでいて、歌詞の中に関西学院のスクール・モットー“Mastery for Service”の意味が込められているとも伝えられている。<sup>(61)</sup>。新校歌制定に当たって、由木と山田の間でどのような会話が交わされたかは想像の域を出ないが、キリスト教主義教育を建学の精神とする関西学院で学んだ二人が、時局を考えて作った校歌であるなら、その奥に深い思いが秘められている可能性がある。それが、讃美歌としか思えないメロディであり、“Mastery for Service”を織り込んだと伝えられる歌詞ではないだろうか。

この詞を作る時、由木の胸にオゾリンの教えが去来していたとは考え過ぎであろうか。なぜなら、ラトヴィア人こそ様々な思いを歌に込めて来た民族だからである。一八四一年、ドイツ人地理学者コール (Johann Georg Kohl) は、<sup>(62)</sup>「ラトヴィア人は誰もが生まれもった詩人で、誰もが詩を詠み、誰もがその詩を歌うことができる」。ヴィーチェ・フレイベルガ (Vaira Vīķe-Freiberga) 前大統領によれば、「民謡はラトヴィア人のアイデンティティの核心であって、歌うことはラトヴィア人である証拠の一つである」。一九二〇年代初頭に作られた国歌は、ソ連に併合されていた間、その存在を抹殺されていた。代わりに、第二の国歌として反抗の精神を込めて歌われたのが、民謡「風よ、吹け」であった。

## V おわりに

関西学院で第二校歌が歌われ出した頃、オゾリンの祖国にも危機が迫っていた。一九四〇年六月一八日、バルト三国のソ連による占領が完了し、翌年六月には多くのバルト人がロシア

奥地に追放された。その一週間後、独ソ不可侵条約を破ってナチス・ドイツが侵攻してきた。バルト三国の中にはナチスの力を借りて独立を回復しようとする動きもあった。スターリン(Иосиф Сталин)率いるソ連とヒトラー(Adolf Hitler)率いるドイツの間で翻弄された挙げ句、バルト三国はスターリンに再占領される。この過酷な運命<sup>(63)</sup>にオゾリンはどう立ち向かったのか。それを明らかにするには、ラトヴィア側の資料をも含めたさらなる調査が必要である。

一九八〇年代終わりに、加藤登紀子他が歌った「百万本のバラ」が日本でヒットした。これは、ソ連の歌手アーラ・ブガチョワ(Алла Пугачова)が二十万枚を売り上げた“Миллион алых роз”(百万本の真紅のバラ)の翻訳であった。作詞ヴォズネセンスキー(Андрей Андреевич Вознесенский)、作曲パウルス(Raimonds Pauls)によるこの歌の原曲が、ブレゼネフ(Леонид Ильич Брежнев)体制末期の一九八一年に、“Dāvāja Māriņa”(メーラが与えた人生)というタイトルで世に出たブリエディス(Leons Briedis)作詞のラトヴィアの歌であることを知る人は少ないだろう。

「百万本のバラ」は、貧しい画家が女優に寄せる思いを歌った、実話に基づく実らぬ恋の歌である。一方、原曲の「メーラが与えた人生」は、メーラ(ラトヴィアの女神、母性の象徴)は娘に命を与えたけれど、幸せはあげ忘れたという内容で、他国の支配を受け続けたラトヴィアの悲哀が込められている。この詞をもの哀しいメロディに乗せて歌ったのは、ラトヴィア人歌手アイヤ・ククレ(Aija Kukule)であった。

加藤の二年も前から、岩谷時子訳詞で「百万本のバラ」を歌っていたのは小田陽子である。ロシアの歌と信じ込んでいた曲が実はラトヴィアの歌であることに気付いた小田は、自らラトヴィ

アまで飛んで関係者に会い、原曲のCD化を実現させた。<sup>(64)</sup> おかげで、今ではこの歌を日本語で聞くことができる。二一世紀に生きる日本人女性のこの感性と行動力をオゾリンが知ったらどうするだろう。それこそ、百万本のバラを捧げることだろう。一方、バルト三国をナチスから解放したのはスターリン率いるソ連だとするプーチン（Владимир Владимирович Путин）前大統領の言い分に対しては、「こぶしをふりあげ、足をふみならし、口角泡を飛ばして」反論するに違いない。

このように、オゾリンを通して世界の動きや出来事を見直してみると、見過ごしていたこと、気付かずにいたことの多さに戸惑いを覚えずにはいられない。「ひとつぶの砂にも世界を見る」<sup>(65)</sup>とはこういうことであろうか。オゾリンと接した九〇年前の学生も、私と同じ思いを抱いたに違いない。学生に与えた影響を推し測る時、教師の在職期間の長短は問題ではない。個々の学生にとっては、在学中に一瞬でも心が触れ合う機会に恵まれたかどうか全てだからである。

オゾリンの存在に気付いてから、少しでもその足跡を辿りたいと願ってきた。しかし、関西学院に残る数少ない資料に限定しても、その全てを詳細に検討したとはまだ言えない。本稿でも今後の課題をいくつか示した。さらに、オゾリンが関西学院で教えたブラウニングの詩の中にも、その姿を探し求めることができるだろう。<sup>(66)</sup> 九〇年の時を超え、今なお何かを語りかけてくるオゾリン。直接教えを受けていない私にまで及ぼすその影響力を心静かに顧みると、同時代を生きた若い教え子たちの魂に彼が残した確かなものが息を吹き返すようだ。

- (1) 「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オズリンをめぐって」の執筆は、二〇〇七年七月二日に、大阪外国語大学（現・大阪大学）のラトヴィア人留学生タイシヤ・カラブリナ（Taisija Karablina）さんから問い合わせを受けたことがきっかけであった。以来、留学生の帰国後も、論文指導された同大学日本語日本文化教育センターの佐野方郁准教授は、オズリン調査の進展に関心を寄せ、私に励ましの言葉をかけ続けてくださった。この場を借りて、お二人に感謝いたします。また、当初『関西学院史紀要』の原稿として時間をかけてまとめるつもりでいた私に、その時点で掴んでいる情報だけでもすぐに発表するよう勧めてくださったのは竹本洋経済学部教授である。「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オズリンをめぐって」が『学院史編纂室便り』に掲載されると、すぐに駐日ラトヴィア共和国大使館と日本ラトビア音楽協会から反響があった。的確なご助言をくださった竹本先生にもお礼を申し上げます。
- (2) 資料により「イアン・オズリン」「ヤン・オズリン」等の表記が見られるが、本稿においては、後述の『琥珀の國』でも用いられている「イアン・オズリン」で統一する。なお、神戸薬科大学の田中研治教授によると、ラトヴィア語表記は Janis Ozoliņš で、発音的には「ヤーニス・ウオゾアリンシュ」と書くのが最も近いそうである。同教授は、私のラトヴィア理解が少しでも深まるよう様々な面で力になってくださった。CD（ラトヴィア音楽）やビデオテープ（ラトヴィアに関するテレビ番組）、新聞記事の切り抜き（ご自身が執筆されたもの）の提供等、田中先生のご親切なご教示に改めて御礼申し上げます。
- (3) イアン・オズリン著、曽根保訳『琥珀の國―ラトヴィア国の過去と現在』、川瀬日進堂書店、一九二一年（英文タイトル *Amber Land or Latvia, Past and Present*）。同書はかつて関西学院大学図書館の目録に掲載されていたが、現在は見当たらない。他館所蔵状況に関しては、アメリカ議会図書館、国立国会図書館、大阪府立中央図書館、神戸市立中央図書館の所蔵が確認できる。神戸市立中央図書館の蔵書には「寄贈 編者」の書き込みがあり、大正十一（一九二二）年五月二十日付けの受入印が押されている。序文は「一九九百二十一年五月十日 神戸関西学院にて イアン、エ、オズリン」で結ばれている。訳者曽根は、

- 関西学院高等学部文科（英文学科）を一九二三年に卒業している。同期には英文学者寿岳文章や日本ライトハウス設立者岩橋武夫等がいる。この学年は「友情と愛と勉学と詩的生活：或は寄宿舎の書齋に、さては学院上の山に、又はオゾリン教授の宅に、彼等は各自の生活を深めつゝ、麗はしくも床しいクラスを作つてゐた」と評された（関西学院文学会『文学部回顧』、一九三二年、五三頁）。初めての翻訳である同書が関西学院大学図書館に保存されていることを知った晩年の曽根は、友人に頼んで、写真を撮ってもらい、序文をコピーしてもらった（向山義彦「ブラウニング研究者 曽根保の自伝」、梅光女学院大学『英米文学研究』三四号、一九九八年、二二三頁）。
- (4) 本項において、特に注記のない場合、『琥珀の國』序文からの引用である。
- (5) 小森宏美・橋本伸也『バルト諸国の歴史と現在』ユーラシア・ブックレット、No. 37、二〇〇二年、四二―四三頁。
- (6) ロシア帝国の紋章「双頭の鷲」に由来する。「双頭の鷲」は現在のロシアの国章にも使われている。
- (7) 当時、リエバーヤはリバウとドイツ名で呼ばれていた（原翔『バルト三国歴史紀行Ⅱ ラトヴィア』、彩流社、二〇〇七年、一五五頁）。バルチック艦隊を率いたロジェストウェンスキー（Зинovie Петрович Рожественский）中将が航海中に記した書簡三一通がロシアに住む曾孫のもとで発見されたとの報道は記憶に新し（『朝日新聞』二〇〇七年一月二五日期刊一五面）。
- (8) 志摩園子「戦間期の日本―ラトヴィヤ関係の考察―（一）外交関係の始まり―」、昭和女子大学『学苑・人間社会学部紀要』第七七二号、二〇〇五年、九四頁。ラトヴィアの独立に事実上の承認を最初に与えたのはイギリスであった。次いで日本が承認した。日本政府がラトヴィアの独立を事実上承認したのは一九一九年一月、法的承認を与えたのは一九二一年一月二六日である（同九六頁）。なお、ヴィーチェ＝フレイベルガ前大統領も、日本を「かつて独立を獲得したわが国を最初に承認した国々の一つ」と認めている（黒沢歩『ラトヴィアの蒼い風』新評論、二〇〇七年、i頁）。
- (9) 志摩前掲文、九六頁。『琥珀の國』によれば、当時のリーガの人口は約六〇万で、バルト諸国最大であっ

た(四三頁)。「リーガ」に対する日本での一般的表記「リガ」はドイツ語読みである(志摩園子「バルト地域関連主要地名対照表」『物語 バルト三国の歴史』、中公新書、二〇〇四年、巻頭頁)。リーガの重要性については、次のように言われている。「(日本帝国)陸軍にとってはラトビヤは重要な国だったのである。…ソ連周辺の地からソ連情報を得るための機関が必要だったわけである」(小野寺百合子「バルト海のとりにて―武官の妻の大東亜戦争」復刊、共同通信社、二〇〇五年、四二頁)。

- (10) 教職員数、学生・生徒数は一九一七年のデータである(“Report of S. E. Hager, Superintendent of the Kobe District, *Year Book of the Japan Mission, Methodist Episcopal Church, South*, 1918, p.9)。高等学部の英文名としては“College Department”が用いられていた。なお、普通学部(普通科)が中学部と改称されたのは一九一五年二月のことである(英文名称も、創立時の“Academic School”から“Middle School”になった)。

- (11) 「職員教授及講師」欄は、職員、教授、講師、名誉教授の順に氏名が記載されている。なお、高等学部(文科・商科)は、一九二二年三月二八日に認可を受け、文学部“Literary College”と高等商業学部“Commercial College”になった。

- (12) 「恩師芳名録」は、名誉院長、院長、名誉高等学部長、高等学部長、商科長、文科長、教授(二二名)、講師(八名)、前商科長、前教授(七名)、前講師(五名)の順に記載されている。

- (13) 中村清「啓明寮生活と文科の人々」、前掲書『文学部回顧』、三―四頁。中村によれば、オゾリンが寮にきたのは一年時の夏休み(一九一七年)である。ところが、『理事会記録』等で確認できるオゾリンの関西学院赴任は一九一八年九月である。中村の名は、『大正六(一九一七)年度高等学部入学志願者受付簿』で確認できることから、当人の記憶違いでなければ、オゾリンは正式赴任の一年前の夏、畑歛三の紹介で関西学院を訪れ、啓明寮に滞在したことになる。すなわち、オゾリンの来日は関西学院赴任の一年以上前であったと考えられる。

- (14) 畑歛三のご子息畑道也名誉教授に、オゾリンのことで父上から何か聞いておられないかお尋ねしたが、オ

- ゾリンという名に記憶はないとの回答であった（二〇〇三年三月八日）。実は、同教授は関西学院交響楽団常任指揮者として、第一回ソビエト演奏旅行（一九七六年二月二十九日～三月一四日）に同行し、当時ソ連に併合されていたラトヴィア共和国リーガを訪れ、ラトヴィア大学講堂の舞台に立つておられる。顧問として同行した小寺武四郎経済学部教授（当時）は、リーガ市長に姉妹都市神戸市長から託されたメッセージを届けられた。これは、関西学院交響楽団にとって初の海外演奏旅行であった。
- (15) 「オゾリン氏の事どもその他」、前掲書『文学部回顧』、二五頁。なお、橋本伸也文学部教授によると、リガ大学というのは存在しないそうである（橋本先生のご教示に感謝します）。
- (16) 『阿ゆみ―畑歎三先生自伝口述』（『三日月の影』別冊）、一一一―一七頁、一九五一年。
- (17) オゾリン前掲書、一九頁。
- (18) *Meeting of the Board of Directors, April 17, 1918, Afternoon Session*. 『琥珀の國』によると、ラトヴィア国民の四分の三はプロテスタントで、その「大多数は福音派のルーテル教会に属」している。ルーテル派以外のプロテスタントで「最も活動してをるのは浸礼教徒である」（五〇頁）。バプテスト教会が日本で創立した学校に、関西学院（一八八四）、西南学院（一九一六）等がある。なお、当時の「銀行の初任給」は四〇円、「公務員の初任給」は七〇円であった（朝日新聞社『値段史年表』、一九八八年、五一頁、六七頁）。
- (19) 一九一七年六月から休暇帰国中だったニュートン院長の帰任は、一九一八年一〇月一九日である（『関西学院百年史』通史編Ⅱ、一九九八年、六〇一―六〇二頁）。
- (20) College Department's Special Lecturer として、Prof. Ozolin 14 hours 1,200.00 が計上されている（『Estimates for 1919-1920, Meeting of the Executive Committee, Nov. 20, 1918』）。
- (21) 志摩前掲文、九二―九五頁。オゾリンの教師以外の活動に関しては、この部分からの引用である。ラトヴィアが東京に（名譽）領事館を開設したのは一九二六年である（福田和美『日光鱒釣紳士物語』、山と溪谷社、一九九九年、一五四―一五五頁）。大使館開設は二〇〇六年で、ペーテリス・ヴァイヴァルス氏が初代特命全權大使として派遣された。なお、オゾリンのいた頃、神戸には二ヶ国の領事館・公館があり、

二二ヶ国約四、六〇〇名（欧米人二、四六二名、中国人二、一〇〇名）の外国人が居留していた。一九一八年の神戸在留ロシア人は五二名で（ポダルコ、ピョートル E. 「日本の〈西欧化への窓口〉」となった神戸―来日ロシア人の研究に関連する考察―、青山学院大学国際政治経済学会『青山国際政経論集』第六五号、二〇〇五年二月、一〇六一―一〇九頁）、白系ロシア人が大勢来日したのは、一九一七年一〇月の革命後、とりわけ一九二〇年代前半からである（ポダルコ・ピョートル「太平洋戦争と日本在住の亡命ロシア人―第二次世界大戦終結六〇周年をめぐって―」『青山国際政経論集』第六八号、二〇〇六年一月、一二六頁）。

- (22) 大正八（一九一九）年七月七日（月）の日記に「朝十時オゾリンヲ送ラント波止場ニ往ク、逢ハズ」とある。村上は関西学院高等学部教師である。日記には、オゾリンがチャペルで講話したことも記されている（大正一〇（一九二一）年二月九日、六月六日、二七日）。

- (23) オゾリンの雇用に関する記述が見られる『理事会・常務委員会記録』は次の通り。Meeting of the Board of Directors: April 17, 1918, Nov. 22, 1918, Nov. 22, 1919, Aug. 3, 1920, and April 21, 1921. Meeting of the Executive of the Board: June 5, 1918, Dec. 19, 1919, Aug. 28, 1920, and June 20, 1921. なお「十一月一九日の『常務委員会記録』にある「春学期の終わり」とは、次にオゾリンの雇用が審議されたのが八月であることから、夏季休暇前の七月を指すと思われる。高等学部の学年暦は四月開始の三月終了で、一九二〇（大正九）年に三学期制（一学期四―八月、二学期九―十二月、三学期一―三月）から二学期制（前期四―一〇月、後期一―三月）に移行した。

- (24) 一次資料とは言えないが、各種年史には次の記述がある。まず、『開校四十年記念 関西学院史』（一九二九年）の「旧教職員表」には、「宣教師並ニ雇外人教師」欄に「(姓名 ヤン・アー・オゾリン (関係学部) 文、商 (職名) 講師 (担任学科) 英文学 (就職年月) 大七、九 (退職年月) 大一一〇、七 (現在) ラトビアリガ大学」と記載されている（二〇―二二頁）。この記述を転載したと思われるのが、『関西学院七十年史』（一九五九年）である。同書第八部附録「旧教職員名簿」に「(氏名) ヤン・アー・オゾリン (所属)



- 文・高商（職名）講師」とある（六五〇頁）。さらに、前掲書『文学部回顧』の巻末「教授在年表」には、ジ・オゾリン（G. Ozolin）の名で一九一九年後半から一九二一年前半まで印が付けられている（三五五頁）。
- (25) ラトヴィア人は、バルト海のように穏やかな海を見ると、水温に耐えられる限り、季節も構わず服を脱いで海に飛び込む習性があるらしい（黒沢前掲書、二五頁）。なお、オゾリンが文部大臣をしていたというのは間違いである。（志摩園子先生と橋本伸也先生のご教示に感謝します）。また、オゾリンは、「イアン・ポーロックとラトヴィア文学」を『関西文学』第三号（関西学院高等部学生会、一九二二年五月二〇日）に寄稿している（栗秋草笛訳）。同論文は「舞子にて千九百二十一年一月脱稿」の文字で結ばれている。
- (26) この文章は『読売新聞』（一九一九年二月二日）の学生界欄に掲載されたものらしい。
- (27) 関西学院学生会『学生会抄史』、一九三七年、八三頁。
- (28) 『ESS年表』『関西学院大学英語研究部（ESS）一〇〇年史』、一九九八年、三〇九頁。
- (29) “Taking Father’s Place” (Com. Students), “The Merchant of Venice, Act IV, Scene I” (Lit. Students) “Twenty Years After” (Theo. Students), *Open Session of the Foreign Language Society of Kwunsei Gakuin*, November 17, 1917.
- (30) 由木康『出会いから出会いへーある牧師の自画像』教文館、一九七六年、六一頁。時期は、由木が四年生の時とあるので、第四回大会（一九一九年）であろう。
- (31) 『関西学院高等商業学部二十年史』一九三一年、七九頁。
- (32) 向山前掲文、二二二頁。
- (33) 『高等学部商科第五回卒業アルバム』（一九二〇年）。新約学者の辻学教授（広島大学大学院総合科学研究科）に写真をご覧いただいたところ、「銀三十」の一場面と考えて不自然ではないとの同意が得られた。ただし、「ユダがキリストをローマ兵に売る」という内容は聖書になく、「売り渡した相手は祭司長たち」との指摘を受けた。辻先生のご教示に感謝します。なお、観客席中央の白髪長身男性はニュートン院長であろう。
- (34) オゾリンは、前者を「最も心優しいアメリカ人女性エレン・ギブス夫人（Mrs. Ellen Gibbs）」に捧げている。

二種類のタイプ原稿（合冊製本されている）はカーボンコピーされたもので、文字の退色が見られ、かなり不鮮明になっている。用紙の劣化も進んでいるため、早急に何らかの対策が必要である。

- (35) 由木康「原田時代の師友寸描」『関西学院七十年史』、一九五九年、四五二頁。

- (36) 大学図書館の山崎富美子さんがオゾリンに寄贈した図書九一冊を一覧表にまとめてくださった。ご協力に感謝します。

- (37) 日本語（ローマ字）と英語の対訳で「舌切り雀」や「桃太郎」が読める *Examples of Conversational Japanese by Arthur Rose-Innes, Part I*, 1914. や Remosuke Fujisawa, *Der Kleine Toussaint-Langenscheidt, Japanisch, Langenscheidtsche, Berlin*, 1910.（藤澤廉之助『獨文日本案内』）等。

- (38) Benjamin Dumville, *The Science of Speech, an Elementary Manual of English Phonetics for Teachers*, W. B. Cline, London, 1911; Edward Dillon, *The Arts of Japan, Little Books on Art*, 3<sup>rd</sup> edition, Methuen, London, 1911; Maurice Materlinck, *La Mort de Tinagiles*, Paul Lacomley, Bruxelles, 1905, 等。

- (39) 前掲書『文学部回顧』、五五頁。

- (40) 「私は招かれて、舞子公園万世園の御宅で同居することになった」と曾根は書いている（向山前掲文、二二二頁）。記録に残るオゾリンの住所は「兵庫県播州舞子電車停留所近傍」である（『商光』第一〇号、一九二二年七月）。また、前掲書『文学部回顧』には「（曾根は）オゾリン教授の二階に住つてゐた」と紹介されている（五五頁）。

- (41) 曾根は三年生の夏休みに、佐藤清教授から頼まれた翻訳の下訳のため自宅に通い、謝礼として二〇円受け取っている（曾根前掲書一六―一八頁）。

- (42) 向山前掲文、二二二頁。ここに出てくる「西灘駅」は、現在のＪＲ灘駅のことと思われる。灘駅は貨物専用の駅として一九一七年二月一日に設置されたが、住民の増加に伴い、二年後の六月、既にあった灘駅を貨物専用の東灘駅として分離改称した。したがって、曾根の感覚としては「東灘駅」に対する「西灘駅」であつたらう（『西灘村史』（復刻）、中央印刷、一九七〇年〈底本発行は一九二六年、兵庫県武庫郡西灘

村役場による」、一七三—一七四頁。

- (43) 向山前掲文、二三二頁。一六ヶ国語の内、類推できるのはラトヴィア語、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語、日本語である。

- (44) 向山前掲文、二三二—二三三頁。「下の東海道線の」とあるのは、山陽本線（東海道線は神戸駅まで）の間違いである。

- (45) 向山前掲文、二三二頁。オゾリンがアメリカで知り合った畑歎三の留学先がカリフォルニア大学なので、オゾリンが学んだのも、南カリフォルニア大学ではなく、カリフォルニア大学であった可能性もある。また、来日後、関西学院で教鞭を執るまで少なくとも一年の期間があったことがわかっている（注13参照）。

- (46) 曾根前掲書、一六三頁。

- (47) 曾根前掲書、一一四頁。「後年、寿岳文章などから、『少尉なので威張り散らしていた』と書かれたり、『軍人ほど嫌いなものはない』とからかわれたこともある」と曾根は語っている（同書、一六三頁）。曾根と寿岳に関しては、同じ年の社会学科卒業生による次の証言もある。「英語そのものでは曾根君が非常によくできましたし、他の科目でもノートをきれいにつくっていました。でも、ノートを貸してくれと頼まれても、絶対貸さなかった。それは悪意があったわけではなく、ノートが汚れるからということでした。その点、寿岳君は質問すればいくらでも教えてくれる男でしたから人気がありました」（山本利寿「飛雲悠々（上）」『関西学院通信 クレセント』第二三号、一九八七年、一一四頁）。また、既出の中村（曾根の二年上級）はこう書いている。「曾根君は英語が好きで何時も私達に英語で話し掛けた」（中村前掲文、三三四頁）。

- (48) 向山前掲文、二三三頁。

- (49) 曾根が当時読んでいたブラウニングの詩集 *Men and Women* に興味を持ったブランデンは、逗留していた菊富士ホテルの一室で週に一度、曾根と共に詩集を読むようになった。そのような関係の中、曾根は自然に母校関西学院のことをブランデンに話した。戦後、英国から日本への文化顧問として来日したブランデンは、文学部教授寿岳文章の求めに応じて関西学院を訪問し、校歌“A Song for Kwansai”を作詞した。この時、

ブランドンが関西学院の依頼を快諾したのは、曾根の存在があったからであろう。曾根によれば「先生と学院とはそれまで何の関係もなかった」のだ（向山前掲文、二三八頁、曾根前掲書、一三三頁）。曾根は、ブランドンによる書き込みの残る詩集を戦時中も離さず身に付け、ブランドンからもらった数十通に及ぶ美しい手書き書簡を宝としていた（曾根前掲書、一四三頁）。なお、ブランドンの菊富士ホテル逗留期間等については、近藤富枝『文壇資料 本郷菊富士ホテル』（講談社、一九七四年）に記述がある。

- (50) 曾根前掲書、一六三頁。ブランドンは、第一次世界大戦勃発の翌年、ロイヤル・サセックス連隊に志願し、その勲功により、一九一六年一月に戦功十字勲章を受章した（ブランドンの家族によるウェブサイトに <http://edmundblunden.org/> より）。

- (51) 二〇〇九年から放映されているNHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」には、日露戦争の戦闘場面が登場する。二〇一〇年四月一日から一六日まで、ラトヴィアを訪問したNHKの撮影チームは、エキストラ三百名以上、馬一四〇頭以上を動員し、リーガ近郊のアーダジ陸軍演習場で戦場シーンの撮影を行った（ラトヴィア投資開発公社「ラトヴィア二〇一〇年の動き」、二〇一一年一月）。

- (52) 英語教育者として、豊かな学殖、周到な教授法、卓抜な話術によって学生を魅了した岡倉由三郎（一八六八—一九三六）の還暦に際し献呈された『岡倉先生記念論文集』（市河三喜編）の基金の一部を用いて岡倉賞と岡倉英語教育賞が設定された（佐々木達、木原研三編『英語学人名辞典』、研究社、一九九五年、二五五—二五六頁）。

- (53) 曾根前掲書、一一三頁。

- (54) 曾根の卒業論文は学院史編纂室に残されている。また、曾根は、報徳銀行社長大江市松から受けた研究費を使ってブラウニング文献を収集していた。その多くは空襲で失われたが、それでもある程度まとまったものを所蔵していた。晩年、関西学院大学から全て買い取りたいとの申し出を受け、本人もそのつもりでいたが、実現しないまま肝心の学長が亡くなってしまったそうである（向山前掲文、二四一頁）。「一九八〇年頃私は先生の寄付されたBrowningの本を見たくて関西学院の図書館に行きました。然しそのような本

はみつかりませんでした」(二〇〇九年一月八日付け向山義彦教授から池田裕子宛書簡)。

- (55) 由木前掲書、一九七六年、五一頁。この他にも由木はオゾリンの想い出を書いている(『浮世風呂のオゾリン先生』関西学院同窓会『母校通信』第五号、一九五〇年、一二頁、「原田時代の師友寸描」『関西学院七十年史』一九五九年、四五二頁)。なお、オゾリンの住所として記録に残るのは、「兵庫県播州舞子電車停留所近傍」である(関西学院高等学部商科会『商光』第一〇号、一九二一年七月)。ただし、これは由木卒業後に発行されたものである。由木の在学中は関西学院の近くに住んでいたのであろう。

- (56) 由木前掲書、四八頁、六三頁。「大正デモクラシーの好時期に、自由な伸びのびとした学園で、思いのままにカレッジ・ライフを送りえたことを、私はどんなに感謝しても、足りないであろう」と由木は書いている。

- (57) 由木前掲書、九六頁。

- (58) 浅野昭太郎「学院校歌物語〔4〕緑濃き甲山」『母校通信』第七七号、一九八七年、一六頁。当時の在校生の中には、「公然と歌える新校歌の制定を切望する声が全学院からわき起こり」という表現に違和感を覚える」と指摘する声もある。『報国団手帳』(一九四〇年までの『学生会手帳』に代わり発行されていた)を開くと、一九四三年版は校歌として「空の翼」の記載はなく、「緑濃き甲山」だけになっている。また、一九三九年五月一七日付の文部省からの照会文に対する高等商業学校長名の返書は、関西学院のスクール・モットー“Mastery for Service”を「奉仕ノ為ニ鍊達セリ」と日本語に置き換えている(辻学「奉仕のための鍊達」登場と時局的判断『学院史編纂室便り』第二七号、二〇〇八年六月六日、一一二頁)。

- (59) 半田一吉『関西学院の歌―関西学院校歌・応援歌・学生歌資料―』、関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八一年、七六頁。

- (60) 浅野前掲文、一六頁。

- (61) 「当時は全ての作家、芸術家に対し、作品に軍国調を表現するよう勧告されましたが、由木康氏はそのような風潮に迎合せず、賛美歌のように誰にでも分かる平易な言葉で、一途に母校の繁栄を願って

作詞されたのは、圧政に屈しない立派で勇気のある姿勢だと思えます。この歌詞の中には“Mastery for Service”を平易に訳されている部分があると音楽の保科一雄先生から教わったことがあります」(二〇〇七年一月一五日付松井辰男氏〈旧中昭二〇〉から比留井弘司学院史編纂室事務長宛書簡)。

- (62) ラトヴィア人と歌については、黒沢歩『木漏れ日のラトヴィア』、新評論、二〇〇四年、一〇一―一二八頁参照。

- (63) バルト三国が辿った過酷な運命が語られる時、一九三九年八月二三日に締結された独ソ不可侵条約には秘密議定書が付属していたことが指摘される。この密約の存在をバルト三国政府がどの程度認識していたかは明らかでないが、その噂は当初から囁かれていたようだ(志摩前掲書、一七九―一八〇頁)。

- (64) 「マラーが与えた人生」は、二〇〇六年二月発売の『ROMANCER』(ラッツバックレコード)の八曲目に収録されている(<http://www9.big.or.jp/~odayoko/romancer.html>より試聴可能)。

- (65) 「ひとつぶの砂にも世界を いちりんの野の花にも天国を見 きみのたなごころに無限を そしてひとときのように永遠をとらえる…」で始まるウィリアム・ブレイクの詩「無心のまえぶれ」の一節(寿岳文章訳『ブレイク詩集』〈世界の詩55〉、弥生書房、一九六八年、一一七頁)。

- (66) 日本でブラウニングと言えば「春の朝」が有名である(時は春、日は朝、朝は七時、片岡に露みちて、揚雲雀なのりで、蝸牛枝に這ひ、神、そらに知ろしめす。すべて世は事も無し」上田敏訳『海潮音』、名著復刻全集 近代文学館、一九六八年、一三二―一三三頁(底本は本郷書院、一九〇五年)。これは、北イタリアのアソロに住むピパという名の可憐な少女が一年にたった一日しかない公休日をいかに過ごしたかを描いた「ピパが通る」の一節である。ロンドンの南郊グリッズの森を一人逍遙していた詩人は「もし人生をかういふ風に唯一人過ぎ行く者があったとする。微賤の身故自分の足跡をこの世に残すといふことは覚束ないにしても、此の一步ごとに、無意識の中に、而も永久的な影響を周囲の人々に投げかけることが考へられないであろうか」と想像し、この劇詩を書いた。ピパは貴重な休日を楽しく過ごすため、アソロの町で最も幸福そうに見える四人を選び、順番にその人になったつもりで、朝、昼、夕、夜を過ごした。

そして、自分が四人の人生に大きな影響を与えたことに気付くことなく、またその四人も自らの人生の転機にこの少女が関わっていたことを知る術もなく一日は終わり、ピパは家路につくのである（曾根保「ピパの歌」『幼児の教育』第三七卷第三号、一九三七年三月、日本幼稚園協会、三六―四五頁）。私には、この可憐な少女ピパの姿に熱血漢オゾリンが重なって見える。